

## 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

( 3 年計画の 2 年度目)

### 1. 研究課題

(和文) グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性

(英文) The Multilayered Contacts among Globalizing Intellectual Thought and Religions with regard to the Possibility of the Humanities

### 2. 研究代表者

(氏名) 奥山直司 (高野山大学文学部・教授)

### 3. 研究期間

平成 22 年 7 月 から 平成 25 年 3 月 まで

### 4. 研究目的 (400字程度)

グローバル化が進行する現代社会における思想・宗教の流通と消費の問題を、複数文化の重層的接触という観点でとらえ、現代のみならず、過去150年程度のスパンの中でこれを分析、考察することを目的とする。そのための柱として、宗教と進化論(ダーウィニズム)をテーマに据え、それらの伝播の諸相を人文学の諸分野にわたって検討する。このうち宗教については、京都大学人文科学研究所人文学国際研究センターの基幹プロジェクトとして進められてきた「複数文化接触領域(コンタクト・ゾーン)の人文学」における問題意識を継承しつつ、仏教、キリスト教、イスラーム教等の各地への伝播過程や変容過程を複数文化の接触としてとらえ、論じてゆく。また進化論については、これを近代思想の一つと見なし、アジア各地へのその伝播を伝統社会と近代思想との接触の事例と位置付け、専ら人文学的見地から、進化論と宗教との関係、進化論の社会・文化への影響などについて検討を加える。

### 5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は、研究会を6回(第3回から第8回まで)、公開講演会を2回実施した。研究会は毎回、2名の研究発表と質疑応答を基本としたが、第8回は、高野山の宿坊を会場とする1泊2日の研究合宿に当て、「聖地と巡礼」をテーマに、2つの講演と4つの研究発表を行った。また2回の公開講演会は、いずれも人文科学研究所本館4階会議室を会場として開催された。その概要は7に記す通りであるが、いずれもエンゲイジド・ブッディズム(社会参加仏教等と訳される)を巡るものであった。これはエンゲイジド・ブッディズムという仏教の新しい潮流を、本共同研究が掲げる2つの柱のうちの宗教のグローバル化という観点から掘り下げようという試みの一部である。また第6回研究会の2日目(2011年10月16日)には、デリー大学のランジャンナ・ムコパディヤヤ氏を招き、同じく仏教の社会参加をテーマにした研究会を実施した。

## 6. 研究成果の概要（400字程度）

本年度は3年計画の2年度目に当たるため、班員の多くに研究発表の機会が行き渡るように心がけた。その結果、アメリカにおける日系仏教、ダライ・ラマ14世の思想、南アジア・イスラーム研究におけるシンクレティズム論、アメリカの公共宗教、シンガポールのヒンドゥー教、近代日本絵画に対する進化論の影響、植民地朝鮮における宗教政策、イスラームとインド宗教の接触事例、現代インドの仏教運動、イスラーム法事案、タイの開発僧など、多様な研究テーマに対して、宗教のグローバリゼーション、または文化接触という観点から新たな光が投げられた。またその中で特にエンゲイジド・ブディズムについては、2度の公開講演会とランジャンナ氏を招いた研究会などを通じて議論が深められ、問題意識の共有が図られた。このような本共同研究の成果情報は、ホームページ<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~globalization/>を通じて公開されているので、ご参照願いたい。

## 7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

2011年7月23日（土）に第1回公開講演会を開催した。講師は阿満利磨氏（明治学院大学名誉教授）、講題は「エンゲイジド・ブディズムの定義とその課題」であった。またコメンテーターとして泉恵機氏（元大谷大学教授）、シルヴィオ・ヴィータ氏（イタリア国立東方研究所所長）、川橋範子氏（名古屋工業大学准教授）が参加した。

2012年1月21日（土）、第2回公開講演会を「開発僧—タイ仏教と地域開発」のテーマで開催した。講師はプラユキ・ナラテポー氏（タイ・スカトー寺副住職）と泉経武氏（東京成徳大学講師）。講題は、それぞれ「タイ開発僧との出会いから出家へ、そして自他の心の開発へ」と「『開発の時代』とタイ仏教」であった。コメンテーターはロバート・ローズ氏（大谷大学教授）をお願いした。

## 8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区分	所属機関数	参加人数	延べ人数
学内	3	11	66
国立大学	3	3	24
公立大学	0	0	0
私立大学	6	8	56
大学共同利用機関法人	0	0	0
民間・独立行政法人等	1	1	5
外国の研究機関	0	0	0
（うち大学院生）	（ 1 ）	（ 1 ）	（ 5 ）
計	13	23	151

※当該年度の共同利用・共同研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

（例）

- ・ 1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、

延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

論文数	10
上記のうち国際学術誌に掲載された論文数	

※研究者がファーストオーサーであること。学内の紀要等に発表されたものを除く

なお、高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文がある場合、その雑誌、掲載論文、そのうち主な論文の詳細等

掲載雑誌名等	論文名	発表者氏名